

研究主題 心豊かな幼児の育成を目指して
— 飼育・栽培活動を通して—

新宿区立戸塚第二幼稚園 川越 秋廣 外4名

1 研究のねらい

本園は高田馬場駅の近くにあり、近隣に生活する幼児は日常生活の中で、自然体験が少なくなりがちである。幼稚園において自然に触れる機会を作ること、自然を愛する心豊かな幼児の育成を目指したいと考え、本主題を設定した。副主題に「飼育・栽培活動」を取り上げ、その視点から、心豊かな幼児を育成するための要素を探り、教師の援助の在り方を明らかにしていくことにする。

2 研究の内容

(1) 「心豊かな幼児像」を共通理解する。

「心豊かな幼児」とは

- ・身近な物・人、事柄に興味や関心をもつ。
- ・感じたこと、考えたことを素直に表現する。
- ・美しいもの、命あるものを大切にする。

(2) 飼育・栽培活動の年間計画を作成する。

- 計画表の栽培物の欄を種、球根、苗のように分類したり、小学校と一緒の畑での栽培物に、学年や栽培期間を絵などで表示したりするなどの工夫をし、3年間の見通しがもてるようにする。
- 栽培物を収穫した後の関連活動として、表現活動・会食などを年間計画に位置づけることにより、幼児に栽培活動の楽しさや収穫の喜びを味わわせ、心豊かな幼児の育成につなげる。
- 昆虫を呼び寄せるための植物を意図的に栽培することにより、幼児が命あるものとかかわる実態から、生命尊重の指導にもつなげる。

(3) 幼稚園と小学校の教師と一緒に、畑の土壌を作り、土の酸度の測定、肥料の種類と使い方や畝づくりを行い、栽培活動における環境づくりの向上を図る。

(4) 飼育物や栽培物にかかわる場面を中心に、心豊かな幼児の育ちにつながる教師の援助の在り方を明らかにする。

- 〈方法〉
- ・ 飼育物や栽培物にかかわる幼児の事例を記録し、分析する。
 - ・ 研究保育を通して、具体的な環境や援助の在り方について探る。
 - ・ 他園の研究紀要や参考文献をもとに文献研究を行う。

〈考察の視点〉 観点を「幼児に育ったもの」と「教師の援助」から出し、発達に即した教師の援助の在り方を明確にする。

幼児の育った姿

- ・ 興味・関心、感じる心
- ・ 思いや感じたことの表し方
- ・ 物や場へのかかわり方

教師の援助

- ・ 言葉かけ
- ・ 環境
- ・ 教材

事例研究の中から、紙面の都合上、5歳児の事例を以下に示す。

事例 **幼児がブロッコリーについてのアオムシとシャクトリムシをとった事例**

5歳児 9月

〈教師の願い〉 幼児が栽培物を育て、収穫の喜びや育て上げた満足感をもってほしい。

〈ねらい〉 自分のブロッコリーを大切に育てるために苗に付いた虫を捕ろうとする。

〈**幼児の活動**〉①教師は朝、畑でアオムシとシャクトリムシが大量に発生していることを確認する。登園後、幼児と畑に水やりに行く。幼児が葉の裏にアオムシとシャクトリムシを見つけ「葉っぱの裏にアオムシがいた！」と言う幼児の言葉に、友達が集まって来る。②「本当だ。たくさんいるね。」と教師も覗き込む。「かわいい!」「葉っぱが食べられちゃう。」「どうしよう。」などの声を聞く。③学級の幼児を集め、④「きく組のブロッコリーに虫がたくさんいるんだけど、どうしよう?」と聞く。すると「捕まえる。」「やっつける。」という意見の他に「逃がしてあげる。」という声が聞かれる。教師の⑤「逃がしたら、どうなると思う?」という問いかけに「どこかへ行く。」「隣のおうちへ遊びに行く。」と答えが返ってくる。そこで⑥「逃がしても、お腹がすいたらまた食べに来るよ。」と話す、幼児も迷ったが捕まえることになり、⑦アオムシは、保育室で飼うことになる。

幼児に育ったもの

- ・ 自分の苗を大事に育てる。
- ・ 自分の苗だけでなく、友達の苗も大切に扱うようになる。
- ・ 栽培物にきた虫の対処の仕方を考え、虫にも命があることが分かり育てようとする。
- ・ 継続して水をやったり、虫が付いていないか見たりする。

教師の援助（言葉かけ・環境）

- ・ 幼児が栽培物と虫について実感をもち考えられるタイミングを探っておいた。①
- ・ 栽培物の大切さと、虫にも命があることを考えられるよう、幼児の言葉に共感したり発問したりした。②③④
- ・ 虫の習性について発問・助言し、幼虫をどのようにしたらよいか考えさせるようにする。⑤⑥
- ・ 幼児の気付きを受け止めながら、虫の命を大切に、保育室で飼う方法があることを知らせる。⑦

〈**評価**〉・ 自分で植え、大事に育てている苗にきた虫をほとんど捕りきった姿から、ねらいは達成されたと考える。
・ 捕まえた幼虫を飼うようにしたことは、命の大切さを幼児に伝えられたと思われる。

3. 研究の成果

飼育・栽培活動を通して、「心豊かな幼児を育成」するための援助の視点が明らかになった。その視点にそって、年齢ごとに教師の援助について以下に挙げる。紙面の都合上、5歳児について示す。

要素	5歳児に対する教師の援助
安定感・安心感	・ 植物、動物を観察し、それらの身になって考え対応し、ともに生活する喜びを感じる。
感じ る 心	・ 一人一人の幼児の気付きを捉えて認めたり、共感したりしながら、友達同士で認め合えるようにする。 ・ 思わず言葉を発してしまいたくなるような体験をつなげていく。 ・ 幼児にとって魅力的なモデルになり、刺激となる存在となるようにする。
興味・関心	・ 幼児の実態にあった教材や見通しがもてる教材を用意する。
動植物へのかかわり	・ 一年のサイクルが分かる援助を心がけ、自分たちで準備できるよう、スコップ、鉢、プランターの準備、図鑑・植物絵本等で育てる物の確認ができるようにしておく。
イメージ	・ イメージを受け止めながら、実物を観察できる機会や状況をつくる。
自分の思いを表現する力	・ 得意なところを生かして自己発揮する場面をつくり、十分に認める。
教師や友達との関係	・ 発見したこと、気付いたこと、調べて分かったこと、困ったこと等を教師の援助を受けながら、学級全体に伝え、育てること、飼育することの喜びを共感し合う。
好奇心・探究心	・ 図鑑や写真などを活用して、満足感が得られるようにする。
目的意識・課題意識	・ 疑問や不思議に思っていることを捉えて丁寧にいかかわり、やり遂げる喜びの経験を積み重ねる。
時間・状況・環境	・ 友達同士で刺激し合いながら、十分に探求する時間や状況をつくる。

<共同研究者> 新宿区立戸塚第二幼稚園 小福田佳子 林美智子 飯田美弥 中川やよひ